

後、「フランス語をもう少しちゃんとやっておけばよかった」という思いは、ずっと心の片隅に残り続けました。

ドイツ歌曲に比べると、フランス歌曲に目覚めたのはやや遅いです。最初にいいなと思ったのはフォーレの歌で、歌曲全集のレコードを買って来て、飽きもせず聴いていました。「夢のあとに」や「月の光」はとても美しいですね。他には、ドビュッシー、ラヴェル、プーランクなどの作品を聴いています。それぞれに面白いのですが、時代が進むにつれて音楽も複雑になり、時に私の理解を超えることもあります。他には、サティの「お前がほしい」。これはおなじみのポピュラー名曲ですね。CMで流れたりもします。

ドイツ語にせよフランス語にせよ、言葉がわからなくても音楽として楽しむことはできますが、やはりそれでは隔靴搔痒(かっかそうよう)という場合も多々あります。残りの人生の時間で、少しでも言葉への理解を深めることができればと思っています。

最後に一言。中国語は母音も子音もたくさんあり、中にはドイツ語のウムラウトのような音や、フランス語の鼻母音のような音も含まれています。ですから中国語をしっかりやっておくと、他の語学にも応用できます(文法はともかく)。学生の皆さんも、中国語の発音をしっかり練習してください。ということで、最後はうまく中国語に落ち着くことができました。



メシアン、プーレーズ、シュトックハウゼン、ノーノ。西洋クラシックの現代音楽家達です。80年代のポストモダン思想流行の後、日本の若者はみな大衆化して、「マンネリ化した文化」批判＝思想運動でもあった現代音楽も聴かなくなったと言われますが、如何でしょう？ 今回紹介する20世紀前半ウィーンの作曲家アーノルト・シェーンベルク 1874-1951は、その運動の開祖様です。



アーノルト・シェーンベルク
(1874-1951)

総毛立つ瞬間って在りますね？ 授業で「エヴァンゲリオン」を見せたら、学生が「悪寒が背中を何度も走った」と感想を書いてました。「君って嫌いだな」「悪いけど貴方が嫌いなもの」といろんな人の声が入り、その声を聞く碇しんじ君は、「どうせみな決まっている世界だろ！」と悲鳴のように叫びます。音楽をそんなヒステリーの状態に置いたのが、シェーンベルクだと思うと良いでしょう。30分以上の器楽曲を聞くのは辛いけど、恐怖映画のBGMとしてなら最高です！

キューブリックの「スペースオデッセイ」に使われたリゲティの「アトモスフェール」の方

が凄い？ でも、シェフェールやヴァレーズのミュージックコンクレートと同じで、ああいうのは、「ゴゴゴ、ガガギー」を大音量で聞き続けることで意識の主体性の無いトランス状態になり、ストレスの溜まる浮世を忘れるって感じですね。シェーンベルクは、主体的意識が崩壊するギリギリの次元に留まります。両親や先生からは勉強しろ！と怒鳴られ、悪友たちからは勉強なんてダサイぜ！と誘惑され、又裂きにあつて、ついに「こん畜生！どいつもこいつも俺を苦しめやがって！」と惑乱状態になるようなもの。ワーグナー（「トリスタンとイゾルデ」）やリヒャルト・シュトラウス（「サロメ」「エレクトラ」）も、物語性たっぷりの愁嘆場を、調性の枠を緩めに緩めて音楽化しました。シェーンベルクはそれを押し進めて物語が狂気すれすれに陥る次元を、無調音楽へ突入することで追求しました（「月に憑かれたピエロ」「期待」など）。今日大学もサブカルチャーの講義に走るなど、文化の大衆化が進む一方ですが、19世紀末の一部「意識高い系」の人々は、大衆から己を差別化するために狂気を演じ、大衆の反感嫌悪をことさらに挑発する前衛芸術に走ったのです。

シェーンベルクは、ウィーンの裕福でないユダヤ人一家に生まれ、父が死んで一家を支えるために銀行に勤めますが、どうしても8歳から始めた作曲がしたくて、辞めてしまい、ほぼ独学でのし上がって行きます。ワーグナー、マーラー、R・シュトラウスら後期ロマン主義を受け継ぎ、「浄められた夜」「グレの歌」などロマンチックの極致である曲の後、調性の枠を弱めてゆく作曲法の流れを押し進めて無調音楽へ突入、さらに12音階技法を編み出します。今の若者が聴く大衆音楽は、西洋19世紀のクラシック音楽と同じぐらい調性をしっかり守る、耳に心地良い音楽ですから、無調音楽を聞いたら、騒音にしか聞こえないかもしれません。彼は後年、「美しい曲を書いていたあなたが、なぜ不協和音ばかりの曲ばかり書くようになったの

か？」と質問されて、「私だって美しい調性音楽を書きたかった。でも、西洋音楽の歴史がそれを許さないんだ」と憤然と答えたそうです。つまり、「これまでとは根本的に違うこと新しいことをせねばならぬ」という近代化の理念に余りに忠実でした。ライバルだった同時代のストラヴィンスキーの「春の祭典」に怒ったパリの聴衆が暴動まで起こしたことは有名ですが、シェーンベルクも、1907年の室内交響曲第1番の演奏で大スキャンダルを起こし、彼を擁護したマーラーは、椅子をガタガタいわせる聴衆に、静かに聴けと怒鳴りました。

ストラヴィンスキーは、カメレオン作曲家と呼ばれたぐらい、初期、原始主義、新古典主義、12音階技法、とそのスタイルを次々に変えたので、真摯さに欠ける小手先の技術屋と、意地悪評論家アドルノに批判されました。逆にシェーンベルクは、自分に課された問題に忠実でした。西欧音楽が進んできた方向を真面目に押し進めた積りなのに一般大衆から嫌悪されたという問題（「モーゼとアロン」に反映）以外にも、自分の妻が、自分を崇拝する若い画家に誘惑されて家出するという事件があります。この頃彼は、「表現主義」的絵画（人間の汚い部分を醜く描くもの）を描いて苦悩を克服しようとしてしました。彼の無調音楽の傑作「弦楽四重奏第2」も丁度この頃のものなのです。自身が狂気の淵にいたわけです。また、ナチズムのユダヤ人迫害に遭い、米国に逃亡します。ユダヤ教に改宗までして、自分の問題として担いました。戦後に、ポーランドの強制収容所からのユダヤ人生還者の語った記録を台本に、鬼気迫る「ワルシャワの生き残り」を作曲します。その後の現代音楽は、頭でっかちな知識人の独りよがり、と揶揄されがちですが、シェーンベルクにとっては切実な解答だったのです。

YouTubeで聞けます。現代音楽という異様な世界があったことに1度はショックを受ければ、自分の音楽世界が広がるかもしれません。